賢い消費者になろう

消費せいかつ VOL.72

問い合わせ　あんしん相談センター　☎24・8071
消費者ホットライン　☎0570・064・370

悪質な排水管掃除業者の訪問販売にご注意を！

5月は消費者月間です
「みんなでつくろう！消費者が主役の社会!!」

今月号から新シリーズがスタートします

松太郎　第1回　絵:みさき　※小松市立高校芸術コース美術専攻

事例　作業着姿の不審な人に「排水管が汚れているのでこのままでは詰まってしまう」「近所の人も契約している」と言われ、排水管の清掃をしてもらい代金を支払った。必要な清掃だったのか。

トラブル回避のポイント

◆宅地内の排水設備について危機感をあおられるなど、言葉巧みに勧誘されたとの相談が寄せられています。
◆「無料で点検」と言われても勝手に点検作業をさせず、その場での契約は避けて周囲に相談しましょう。
◆契約後や清掃後でもクーリング・オフできる場合があります。

ごみナビ vol.5　捨てる前に考えて！その紙リサイクルできませんか？

一般ごみとして出されているごみ袋の中には、リサイクルできる紙がたくさん含まれています。
紙は大切な資源。ごみとして出す前に「資源になるのでは……」と、もう一度確認しましょう。

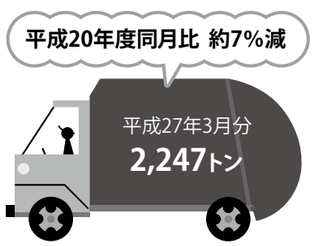
■リサイクル可能な紙　ほかにも包装紙、紙袋、ノート、メモ用紙などがあります。

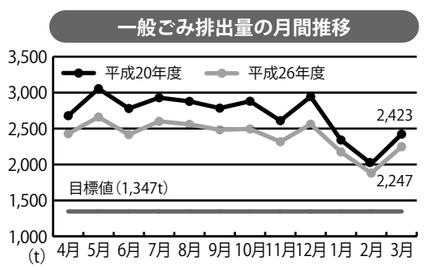
▲お菓子、薬、ティッシュ（ビニール部分ははがす）の箱

▲ポスター、パンフレット、カレンダーなど

▲ラップやトイレットペーパーの芯

散らばらないように、封筒や紙袋を利用して、古紙の雑誌・チラシと同じ区分で出しましょう。





1年間を通して比較すると、ごみの量は平成20年度と比べて約11％減りました。目標達成のために、私達一人ひとりの取り組みを見直してみましょう。

問い合わせ
環境推進課　☎24・8069

「のど渇いたんならこのお茶100万円で売ってあげるよ」
「そんなヤクチャムナイこと言わんと、飲ましてちょうだい」

みまっし、きくまっし 小松の方言

連載206

加藤和夫●金沢大学人間社会学域教授・日本語学

小松方言の語源　その31

―京都語由来のメンデとヤクチャムナイ―

今回は、かつての中央語（京都語）由来の小松方言として、「醜い」の意味のメンデ、「たわいもない。役に立たない」の意味のヤクチャムナイをご紹介します。メンデについては本連載の140回と141回、ヤクチャムナイについては108回でも取り上げていますが、今回は改めてその語源について考えます。

メンデはメンドイ（面倒い）に由来

小松で「醜い」の意味で使われる方言には、多数派のメンデのほか、メンデー、メンダイ、メンドイなどがあります。メンドイというと最近の若者言葉でも「面倒くさい」の意味で使われることがありますが、「醜い」の意味の小松方言メンデの語源は、江戸時代初期の上方語文献（浄瑠璃作品など）に登場する「めんどい（面倒い）」だと考えています。

『日本国語大辞典 第二版』（小学館）によれば、「めんどい」の意味には、①「面倒である。めんどうくさい」と②「みっともない。見苦しい。醜い」の二つがありますが、②の意味の「めんどい」が小松に伝播したものと考えられます。

「醜い」の意味のメンドイは、北陸の石川・福井のほか、近畿地方、中国地方の岡山・広島・山口、四国地方の徳島・愛媛・高知などにも分布するようです。メンドイがメンダイに変化し、メンダイの〜ダイ[dai]の[ai]の部分が融合・長音化して[e:]となってメンデーが生まれ、さらに末尾の長音が落ちた形がメンデでしょう。

ヤクチャムナイは「益体もない」から

「たわいもない。役に立たない」の意味の小松方言ヤクチャムナイは、中世末期から江戸時代初期の京都語文献、上方語文献に登場する「やくたい（益体）もない」が語源と考えられます。「益体」が「役に立つ」の意味で、その否定表現にあたります。中世末期の京都語が記録されている「日葡辞書」（1603−04年）には、「Yacutaimo nai（ヤクタイモナイ）〈訳〉秩序も調和もない、あるいは何の役にもたたないこと」といった例が見えます。ヤクタイモナイが石川に伝播する過程で、ヤクチャモナイ→ヤクチャムナイと変化したものと考えられます。石川・富山ではヤクチャモナイ、ヤクチャムナイが「むちゃだ。途方もない」の意味で使われる地域もあります。

歴史の舞台裏　連載199

【「松の図」に秘めた思い】

いよいよ全国植樹祭が開催されます。小松市史も間もなく美術工芸編を発刊しますが、これにちなんで木をモチーフにした作品を紹介します。

今回、天皇皇后両陛下がお手植えされる樹種の一つに、小松の市木でもあるマツが含まれています。祝い事の景物としての松も、作品となるとバランスが難しいのか意外と少なく、ようやく二代三ツ井為吉の「松の図大皿」を見つけました。

為吉は、初代徳田八十吉に師事し、二代浅蔵五十吉とは机を並べた仲です。大戦中に北出塔次郎工房に疎開し、しばらく助手を務めたことから、塔次郎の作風に影響を受け、新境地を開きました。

この「松の図」は、昭和25年の日展出品作で、塔次郎の影響が色濃く出た作品です。八十吉は古九谷風で細かく繊細に描くのに対し、塔次郎は、周縁部に小紋を散らし、見込みに鳥や魚文を大きく悠然と配します。為吉の作品も縁回りは赤で小紋を散りばめ、見込みに大胆に松を、しかも全身でなく枝振りを描いています。意匠的な構図でなく、写生を基本とする古九谷風の姿勢が窺えます。

一点の作品ですが、作者の思いとこれまで歩んできた技術の粋が凝縮されています。小松市史ではこの奥深い部分を更に詳しく伝えていきます。

生涯学習課市史編纂担当
☎24・8274

▶松の図大皿（博物館所蔵）